

志願海軍兵、終わりまで幸運だった

滋賀県 山 中 宗 次

私は大正十三年六月十八日、農家の生まれで長男ですが、上の三人が生まれてすぐ亡くなっており、父母姉妹の四人家族です。農地は一町三反で米作専門でした。昭和十七年十九歳で海軍志願したのですが、一人息子が軍人になるのには親父は猛反対でした。ちょうど大東亜戦争がハワイの大戦果で火蓋を切ったばかりですから、世をあげての軍国主義華やかな時代でした。

私は長男であっても男であれば遅かれ早かれいつかは兵隊に取られるくらいなら職業軍人になりたいと憧れておりました。

海軍に志願するには志願票に親の承諾の印がなければ出せません。親父は真っ向から大反対です。母は観念して父の説得に回ってくれ、漸く親父も「受ける以

上必ず合格しろ！ もし不合格だったら野洲川に入っ
て死ぬ！ その覚悟があるなら仕方がない」と言っ
て承諾の印を押してくれました。

昭和十七年三月末に野洲小学校に海軍から試験官が
来て試験が始まりました。当時は野洲郡玉津村でした。
村から十七人が受験しました。試験は学科から始まり
体力検査の肺活量、腕力テスト、視力等の検査があり
ましたが、一つでも不合格になるとあとの検査なしで、
その場で打ち切り「帰れ」となるのです。

私は幸いにも、すべて合格しましたが、十七人受け
て五人が合格しただけの厳しい試験でした。この時点
で内定となり本採用の通知は一カ月以内に舞鶴鎮守府
からくるとのこと。

お陰で野洲川に飛び込まなくてすんだのですが、父
は複雑な心境だったと思います。間もなく鎮守府から
本採用通知書が届き、五月一日、舞鶴海兵団に入団、
兵科は水兵と記されていました。

父はこの通知書を大切に保存しており今でも残って
います。私は志願票を出す時に希望する兵科の第一志

望欄に機関兵と書いたのですが、希望は容れられず水兵となっていました。なぜ機関兵を志望したかと申しますと当時機関車に憧れていたもので、汽車の釜焚きと海軍の釜焚きを連想して将来の職業を選んでいたのです。

五月一日入団と決まったのはよいのですが、その季節は農家にとって苗代の準備をする最も忙しい時ですから前の日まで田圃で働きました。村で海軍に入るのが三人いて、入団は少しずれていましたが、送別会は村と部落とそれぞれ一緒にやってもらいました。出発には琵琶湖の定期船の波止場と汽車の駅と二カ所がありましたけれど、出発場所も鎮守府の指定で駅となっております。波止場だったらテープの切れたあととも船が見えなくなるまで見送ってもらえるのに、汽車ではあっけなく終ってしまおうと残念に思いました。

いよいよ入団して三カ月間の新兵教育でしごかれ、ビンタ、精神棒をしこたまもらいましたが覚悟の上であり、生命は国に捧げるつもりだったので少しも後悔する気はありませんでした。

教育が終了すると同時に特別砲艦「日東丸」に乗りました。これは商船を改造した砲艦で口径二〇センチの大砲が前中後に各一門あり二五ミリ連装機銃が艦橋に一基、それに後部甲板に機雷敷設機があり、ドラム罐のようなものに爆薬を詰めて敵の潜水艦に備えていました。

舞鶴港の入口には通行口以外には機雷原があり、敵潜水艦の侵入を防いでいました。「日東丸」の任務は主に南方のサイパン、トラック、ラバウル方面に向けての資材輸送が任務で、たまに輸送船団の護衛もありましたが、輸送任務の時は横須賀を基地にしています。

北海道や東京にも行き靖国神社に参拝したこともありました。航行中に台風に遭い、艦内の居住区まで波が入って水浸しになったこともあります。緊急の時は輸送船では間に合わず、「日東丸」が資材の輸送に当たりました。

昭和十八年の夏頃まで「日東丸」に乗っていましたが、潜水艦に乗ることになり、それには水雷学校に入

らねばならなくなり、トラック島で「日東丸」を退艦し、内地帰還のため航空母艦「龍鳳」一三三六〇トン（潜水母艦大鯨一〇〇〇〇トン）を改造した母艦で、当時ラバウルに飛行機の補充、修理をして帰る途中）に便乗しましたが、サイパン島の近くで敵潜に襲われ、水雷がスクリーナーに当たり航行不能になり、随伴艦にワイヤーで曳航され横須賀にたどり着いたのです。

あとで聞いたところによりますと「日東丸」は、その後、機雷に触れて後部がやられ、私のいた分隊全員が戦死したそうです。あのまま「日東丸」に乗っていたら私も同じ運命をたどったと思うと、運・不運はどうにもならないと思います。

水雷学校での教育は三カ月で終わり、続いて大竹の潜水学校の普通科に入るため夜行列車で横須賀から広島を通って大竹に行きました。海軍では色々な学校を出ていないと出世ができないそうで、学校から学校の連続でした。

大竹の潜水学校普通科の三カ月間の教育を卒業、舞鶴の潜水艦基地隊（防備隊）に移り、潜水艦「呂六十

四号」に乗り組みました。この潜水艦は大正十四年建造の旧型ですが、昭和十六年十二月の太平洋戦争開戦時には北方作戦に従事した経歴がありました。乗組員は百人くらい。排水量九八八トン、全長七六メートル、水上速度十六ノット、潜航時間は六時間が限度、浮上時はディーゼルエンジン、潜航時は蓄電池に切り換え、浮上と同時にエンジンが発電機に連動して充電する仕組みです。

艦内の空気は清浄器を使いますが、浮上してハッチを開ける時は、流れ込む空気の味は何とも言えぬ程おいしい味がしました。空気と水が潜水艦乗りの一番の有難味です。潜ると艦内の気圧が上がるので高圧ポンプを回してタンクに詰め込む方法で気圧を下げたのです。食事は海軍の中では航空隊に次いで御馳走が出ました。狭い艦内で不自由な生活ですからせめて食事くらいいいわけです。

レーダーが使われるようになってからは艦体にレーダーを防ぐ効能があるとかで、防探塗料と称するものを艦体に塗るようになりました。

昭和二十年四月八日に、私は大竹の潜水学校の高等科に入るため、五人と共に「呂六十四号」を退艦したのですが、これが私にとって思わぬ出来事につながったのです。

私等五人が下りた「呂六十四号」は訓練のため瀬戸内海に回航、潜水中にB29の投下した機雷に触れ、四月十二日沈没してしまつたのです。早速救助作業がはじまり潜水夫が艦体を叩いたら中から反応して音が聞こえたそうです。

水深三〇メートルの海底なので、クレーンで吊り上げ海面まで浮上したところ、不運にもワイヤーが切れ再び沈んでしまつたそうです。たつた四日間が私の生死を左右したと共に不運な戦友達の無念さは、いかばかりかと察するにあまりあるものが、ズーっと私の心の重荷になっておりました。

十年前の昭和六十三年に戦後初めて戦友会に招かれて出席しましたところ、生きていたのかよかつたと言われました。そして、あの「呂六十四号」が昭和二十一年に引き揚げられ、死体確認のため関係者が呼ばれ

一人一人確認してから茶毘に付されたと聞かされ、自分の戦後がやっと終わった、良かったと心が軽くなりました。今でも遺族が集まって沈没地点で洋上慰霊祭が行われているそうです。

米国は人命尊重の国で、飛行機でも船でも脱出装置が整備されていたようですが、日本でも昔は脱出装置があつたと聞いていますが、日本では軍人は死ぬのが本分で脱出して生き延びることは軍人精神に反する。潔くないとかで装置を外してしまつたそうです。

昭和二十年八月六日、広島に原爆が投下された時は大竹でも雷みたいな閃光が見えて、間もなくキノコ雲が大きくなって行くのがわかりました。当時は原爆とは知る由もなく火薬庫が爆発したんだなどと言っていました。

あの日は付近の町や村から勤労奉仕に多くの人が広島島に行っていたのでスパイが知らせたんだと流言が飛んだものです。

夕方になると、学校の側にある玖波駅に続々と被災者が逃れてきました。学校も空襲の目標になる恐れが

出てきたため、夜は玖波駅の近くの宿屋に泊まるようになり、魚雷などは山にトンネルを掘って格納しました。

終戦の玉音放送は学校で聞きました。学校では特別な儀式もなく、将校は戦犯を恐れて早々いなくなりました。私は終戦後一カ月間山のトンネルにある魚雷の警備に残りました。大竹の山には特攻隊の兵舎があって敗戦を本気にせず、ヤケになり抜刀して樹に切りつけたりしていました。学校に残っていた食料は付近の民間人が持ち帰ったようです。

私が帰る時は士官用の短剣が放ってあったので持ち帰り海軍生活の記念品として保存しています。

昭和十八年五月、入団する時一緒に入った村出身の三人ですが一人は南方で、一人は航空兵で共に名誉の戦死を遂げ、私一人だけが生き残りました。

親父は長男が無事帰って来たので喜んでくれました。息子が二回も幸運に恵まれて元気な姿を見せてくれたことを、祖先のお陰と受け取っているように見受けられました。

最近、軍艦の写真集を買ってみましたら「呂六十四号」の在りし日の雄姿が載っていましたが感無量でした。砲艦「日東丸」は載っていませんでしたがどうなったのか消息を是非知りたいと思います。

海軍航空機整備

空母「瑞鶴」より奇跡の生還

大阪府 樋元正三

私の生地は、鹿児島市山之口町一二〇で、大正十一年三月四日に生まれました。家業は米屋で、父は私に家業を継がせるため商業学校に入れてくれました。私はここを卒業しましたが、機械、電気関係のことがやりたかったので、昭和十七年徴兵ですが、昭和十四年六月海軍を志願し佐世保海兵団に入りました。

海軍の一員となるや「早朝総員起こし五分前」に始まり起床以後、食事から休憩就寝に至るまで総て「五分前精神の涵養」でしたし、艦諸共連命共同体として